

同じき七卯のとし十月善兵衛再びきたり、前の製せしよりも更に大にして星をみるも亦明なるものを携へて觀せしむ、歳星をみるに、星面に三帶ありて、三引の紋のごとし、鎮星を見るに、一の輪ありて、本星を斜に纏へり、其輪左のかたは本星の上にかゝり、右のかたは本星の下に入る、其輪本星の上下に出るゆゑに、長く米粒ごとく見えしなり、後又明年辰の春同じくこれを見ず、時に太白星をみるに、すこし虧て十二日の月を見るがごとし、銀河の中の最白きを見れば、細小の星數十百千聚て、紗囊に螢を盛ごとし、鬼宿中の白戸氣をみるに、小星廿八聚りたるなり、以上は橘南谿漢文に記されしを和してこゝに擧ぐ、予は天學のこと露ばかりも窺はざれば、一言をいゝる、に由なし、彼岩橋善兵衛が奇工、實に希代のこと、すべし、京師にも又七なるもの、自鳴鐘に奇工を盡し、蠻製の器物などたがはず摸せるたぐひ、すべて人の才は他より計るべからざるものなり、

〔寛政曆書儀象誌〕蠻製寒暖儀并蠻製驗氣儀○中略

寒暖儀之制、本邦既精良矣、然驗氣儀、理及其制未盡善、故二儀共就蠻製述其式○下略

〔蘭學事始上〕故の相良侯、當路執政の頃にて、世の中甚だ華美繁花の最中なりしにより、彼船より、ウエールガラス天氣檢器、テルモメートル寒暖檢器、ドンドルガラス震雷檢器、ホクトメートル水液輕重檢器、クルカームル暗室寫眞鏡、トーフルランターレン鏡現妖鏡、ゾンガラス觀日玉、ループル筒、呼遠といへる類ひ、種々の器物を、年々持越シ、其餘諸種の時計、千里鏡、ならびに硝子細工物の類、あげて數へがたかりし○下略

〔天文義論上〕問、近代ニ至テ、戎蠻ノ天學、唐土ニ入テヨリ、中華ノ天學廢レテ、戎蠻ノ天學隆ンニ行ハルト云人アリ、然ラバ戎蠻ノ天學ハ、璿璣渾天ノ說ニモ勝レル者乎、如何、

曰、大明萬曆ノ比、戎蠻ノ天文說、中華ニ入テ、測量圖器ヲ傳ヘタリト云リ、其比、日本筑紫ニモ、蠻